

二人芝居短編四景

「水」「friendship」「宅急便」「きみとからっぽ」

作／村野玲子

登場人物

「水」(11p) ————— [2003年執筆]

男

女

「friendship」(9p) ————— [2011年執筆]

薫

由紀

「宅急便」(4p) ————— [2011年執筆]

男

女

「きみとからっぽ」(7p) ————— [2015年執筆]

女1

女2

男女共用の公衆トイレ。

パーティドレスを着た女、入り口から現れる。

鏡前に陣取り、おもむろに化粧を始める。

そこへ、白ネクタイで正装した男、急ぎ足でやってくるが、女を見て速度をゆるめる。

男と女、鏡越しに目が合ってしまった、申し訳程度の会釈をする。

女、意識から男を排除し、化粧に集中する。

男、さりげなく目をそらしながら、小用に向かう。

男、小用の前に立ち、しばし考える。

(小声で) サキ……サト……サトミ……

……

サトミちゃん。サトミちゃんだ。ねえ、サトミちゃんじゃない。

(困り顔で鏡越しに男を見つめる)

ほら、やっぱりその困った顔、サトミちゃんだ。

ええ、まあ……サトミです。

(同時に真似して) サトミです。ほら、やっぱりそうだ。今、何してるの。

化粧……

いやいや、そうじゃなくて。仕事とか、恋人とか。

いえ……別に……

何かないの。浮いた話の一つでもさ。

さあ……

(真似して) さあ、じゃないよ。もうお互い、いいトシなんだからさあ、何かあるでしょ、何か。

男、用を足そうとする。

女 男 女
（うって変わった様子で）待って。
え。

女 男 女
そこでするの。
うん。

女 男 女
それって、どうかと思わない。

女 男 女
どうかって、何が。しょうがないだろ、

女 男 女
あなたと私は昔何かあったのかもしれないけど、

女 男 女
いや、あったっていうか、

女 男 女
仮にも化粧をしている女性の前で用を足そうってその根性は

女 男 女
疑うに値するものがあるわね。

女 男 女
は、いや、何、

女 男 女
おかしくない、そういうの。ここは確かにトイレよ。だけどこ

女 男 女
こでこうやって美しさを懸命に磨いている女性が立ちすくん

女 男 女
でいるわけだから、多少なりとも気を使って個室でするなり

女 男 女
なんなりするのが礼儀ってものじゃないの。

女 男 女
サトミちゃん、

女 男 女
いい、これだから日本の男性っていやなのよ。女性の前で気も

女 男 女
使えない、ましてやこういうった公共の場においては男の方が

女 男 女
優先されて当然のものだと思ってる。そういう根っからの傲

女 男 女
慢さ、無意識下における甘えがこの日本経済の地盤沈下を引

女 男 女
き起こす原因になってるのよ。そこんところも全然わかって

女 男 女
ないのに竹中やめろなんて本当によく言えたものだわ。あの

女 男 女
人あんなに頑張ってるのよ。なのにみんな勝手なことばかり

女 男 女
言ってる。いいじゃないあんなによさそうな人が一生懸命やっ

女 男 女
てるんだから。田村亮子に似ていることくらい目をつむって

女 男 女
あげればいいのよ。本当に心が狭いっただらありゃしない。もう

女 男 女
どうやったって許せないわ。大和魂はいつたどこに行っ

女 男 女
のかしら。

女 男 女
わかった、わかった、わかったから、個室でするから、ね、そ

女 男 女
れでいいんでしょ、それで……

女 男 女
よくないわよ。よくないでしょ。いいわけないのよ、

男 わかった。君の言い分はよくわかった。僕が悪い。いや、僕
が悪かった。改めるよ、これから先は。生まれ変わる。今、す
ぐ生まれ変わる。いいね。生まれ変わりだよ。生まれ変わらだ。
いやあ、こんなに素晴らしいことはない。(個室に入ろうとす
る)

逃げるのね。

だから何なんだよ。俺に用を足させろよ。

どうぞご勝手に。

チツ。(個室に足を踏み入れる)

(強く) ねえ。今、舌打ちしなかった。

……ああ。したよ。

どうしてしたのか、おしえてくれる。

(強く) そういう気分だったんだよ。

そういうって、どういう。

……

もう一度尋ねます。あなたのおっしゃるそういうのそうは、い
ったい何を指すのですか。

……では正式にお答えします。僕の言ったそういう気分のそ
うは舌打ちしたくなるという意味を示します。これでいいだ
ろ、バカにしやがって。

しやがって。

(言いなおし) バカになさりやがって。

そんな敬語、あるわけないじゃない。

あろうがなかるうが、使う人間の勝手だろ。

敬語もろくに使えないの。さいつてーの男。

何だと。

社会性のなさの証よね。はつきり言って、出世しないわよ、そ
れじゃ。

いい加減にしろよ。

早く済ませば。空いてるわよ、全部。お好きなどころで、どう
ぞ。

……もういい。

男

女

男

女

男

女

男

女

男

女

男

女

男

女

男

女

男

女

男

女

男

女

男

女 (化粧を完成させ) 完成、と。(化粧道具を手提げにしまいな
がら) 急がないと、始まっちゃうわよ。
男 何が。
女 結婚式。行かないの。
男 ああ、そうか。
女 ところでさ。すつごく言いにくいんだけど。
男 何。
女 チヤック、開いてるよ。
男 ……

女、言い放って出て行く。
男、チヤックを閉める。
男、舌打ちをし、トイレを出る。

2

男女共用の公衆トイレ。
ぐでんぐでんに酔った先ほどの女が、やや酔いの先ほ
どの男に何とか支えられながら、入り口から入って
くる。
女は、片手に手提げを、もう片手に脱いだヒールをだ
らしなく持っている。

男 ほら、こっち。

男、女を個室に入れてやる。

男 大丈夫か。
女 うるっさい。出てけ……
男 (靴を引き取り) ああ、はいはい。

女 男 女 男 女 男 女 男 女
（個室の扉を閉める）
（扉の前に立ち）大丈夫かー。
気持ち悪い……
飲みすぎだよ。
そんなのわかってるに決まってるでしょ。
ああ、はいはい。
わかっちゃいるけど、やめられないときだって人間たまにはあるものよ……
はいはい。そうですね。
（歌う）わかあっちゃいるけど、やめられない、と……
……

男、ヒールを持ったまま、鏡の前に行き、自分の顔を眺める。
髪を掻き揚げたり、アゴをさすったりする。
一刹那、鏡の中の自分の目と見つめあい、遠い視線をする。
女、突然出てくる。

女 男 女 男 女 男 女 男 女
なあに。自己との対話。（よろつく）
ああ、ほら、危ない。
さわらないで。（手洗い場につき）ああ、気持ち悪い。
何でそんなに荒れてんだよ。
うるっさいわねえ。女にだって荒れたいときぐらいあるのよ。
うぐ……
（背中をさする）
はあ、はあ、はあ……吐いた分だけ、強くなる。親父の小言、パート3。
無理すんなよ。
無理なんか、してない。
してないしてない、ああ、してない。
そう、私は、別に無理なんか……（小用に）うぐ……

男 (強くさする)

女 ごめん……

男 ん。

女 なさい……

男 ああ。

女 (男の顔を見る)

男 何。

女 誰だっけ。

男 だから、何度も言ってるじゃん。大学の勉強会のサークルで半年だけ一緒だったナカタニですって。

女 ナカタニ、ナカタニ、ああ、ナカタニ(ふらふらと個室の方へ)。

男 覚えてよ、いい加減。

女 忘れっぽいのよ、どんなことでも。

男 その場の衝動で生きてるからだろ。

女 衝動って何よ…… (個室の入り口で) うぐ……

男 (さする)

女 はあ、はあ、はあ……やってられない……

男 それも聞いたよ。

女 私、あの人のこと、好きだったのよ、わかる、この気持ち。

男 それも聞いたよ。

女 どうして私があの人とあの頭の悪そうな女との結婚式に顔出

男 さなくちやいけないわけ。

女 どうしてだろうねえ。

男 (男の手を払いのけて) 本来なら私があそこにいるべきなのよ。にこにこ笑って、ありがとうって……なのに、どうして。

女 どうして私はこんなウス汚いトイレであんたみたいなら

男 ぼんやりとした将来性のない男と一緒に乳繰り合っ

女 ならないわけ。

男 ……

女 あんたねえ。悔しくないの。

男 何が。

女 かたや下請け出版社の編集アシスタント。かたや外資系大会

女のハイパーエリート。今の段階で、相当収入に差があるはずよ。

男 俺は別に。自分のやりたい仕事ができるから……

女の やりたい仕事、やりたい仕事って。そうやって選り好みばかりしてるから、いつまでも傍流から浮かびあがれないままなのよ。わかってる。

男 いいんだよ。俺は俺で、あいつはあいつなんだから。

女の ふん。いつまでもそんな教養番組みたいなことぬかしてるから……いつまでも……いつまでも……（口を手で覆い、倒れそうになる）

（反射的に女を支えようとする）

（男を払いのける）

大丈夫。

反射。

反射。

跳ね返ってくるのよ。自分の言葉が全部。

跳ね返る。

女 ……なんでもない。（用具洗い場の蛇口をひねる。が、水が出ない）チッ。

（呆れたような笑いを浮かべ）舌打ちすんなよ。

女の うるっさいわねえ。そういう気分なのよ。

男 そういうって、どういう気分だよ。

女の そういうってからは、そういうってことよ。……デジャブだ。

何が。

あたし、この会話したことある。

女の 今日な。俺としたよ。

男 そう。……いつ。

女の 会ったろ、ここで。

男 うん。

女の そんなときに。

男 うそお。

女の 本当。

女 男 女
あたしが、初対面のあんたの前で、
だから初対面じゃないって、
ああ、……なんだっけ。

女 男
ナカタニ。

女 男 女
そうそう、ナカタニくんとやらとここで初めて
久しぶりに。

女 男 女
……主観と客観の相違ね。

女 男
何が。

女 男 女
あたしにとっては初めてなのよ。いや、初めてに等しいわ。

女 男 女
……あのなあ、

女 男 女
いいじゃない、別に。初めてだろうが何度目だろうが、今私と
あなたはここでこうやって同じ空間で同じ時間をともに過
しているんだから。

女 男 女
（投げやりに）そうだね。

女 男 女
投げやりな同調。

女 男 女
……

女 男 女
もういい。私、帰る。

女 男 女
二次会、どうするの。

女 男 女
知らない。あんた一人で行けば。

女 男 女
別にいいけど、一人で帰れる。

女 男 女
（強く）帰る。意志あるところに道は開ける。（よろよろと出
口に向かう）

女 男 女
ねえ、

女 男 女
何。

女 男 女
靴。

女 男 女
とって。

女 男 女
はいはい。（拾い上げ、女の前にそろえて置く）それにしても
さあ、

女 男 女
（片足をヒールに入れながら）

女 男 女
あいつの顔、見た。俺ら見た瞬間、固まっちゃってさあ。びっ
くりしたんだろうな、俺とサトミちゃんが一緒に来たから。何
でおまえら並んでんだよって感じでき。爆笑もんだったよな、

男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女

あの顔。……おい、どうした。

(青ざめた顔で、動かない)

大丈夫か。気持ち悪くなつた。

(やっとの思いで) それなりに、

(聞きとれず) え。

それなりに、幸せそうだったよね。

あ。ああ。そうだな。

よかつたんだよね。

まあ……

私の入るところ、どこにもないや。(片足分のヒールを残したま

ま、駆けて行こうとする)

(つかまえる)

……

しようがないだろ。

……うん。

オギノだって、サトミちゃんのこと、忘れたわけじゃなかったんだから。

……オギノ。

オギノ。

ハギノでしょ。

何が。

いや、だから。あの人。ハギノくん。ハギノトモヒサくん。

どの人。

だから、新郎。

オギノだよ。オギノミチハル。

え。(手提げを漁り、封筒に入った招待状を探し出す) ハギノ。ほら。

(招待状を見て) ……来週になつてるよ。

え。(見て) ほんとだ。

……失礼ですが、お名前は……

サトミナオコ。

あれっ。

男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男

何か。

いえ、詰まらないと、いいですね。

つまらないはず、ありません。

いえ、あの、

ほら、靴はいて。

あ、すみません……

いい夜だ。

あの。

はい。

初めまして。

初めまして。

ふふ。

はは。

ありえない。

本当に。

飲みましょう。

朝まで。

飽きるまで。

飽きないかもよ。

くたばるまで。

金が尽きるまで。

カードがあります。

俺、ないや。

貧乏人。

成金女。

甲斐性なし。

見栄っ張り。

男と女、言い合いながらトイレから去る。 ■

とある、都心の高層ビルにあるカフェ。
平日の午後。閑散とした店内には明るい日差しが差し込み、大きな窓の外にはビルや道路、線路が広がっている。

窓際の席に女が一人、コーヒーを飲みつつ、ぼんやりと
している。

携帯電話が鳴る。

女、じつと見るだけで、とらない。

着信止む。が、すぐにまた鳴る。

女、着信画面を眺めるが、とらず、窓の外を見る。

着信止む。

女、携帯を手に取り、画面をじつと眺める。

そこへ女が一人、現れる。

薫 由紀い。

由紀 ああ。

薫 待たせちゃったよね、ほんつとごめん、休みの日に呼び出しと
いて。

由紀 ううん、大丈夫。(携帯電話を鞆にしまう)

薫 (店員に)すみませえん、えつとね、レモンティお願いしまあ
す。やだちよつともう、久しぶりい。

由紀 そうだね。

薫 てか何年ぶり？いつ以来？

由紀 最後に会ったのが一昨年の、あれ、何だっけ。

薫 九月じゃない？小百合の結婚式の二次会。

由紀 そうか。え、でもそれってそんな前？

薫 前前え。

由紀 そっか、早いねえ。

薫 ね、聞いた？小百合、子供産まれたんだって。

由紀 ええ、本当？

薫 うん、写メ送られてきた、しかも一斉メールで。頭来たから即
消してやったけど。

由紀 ええ、何で。

薫 だってさ、こっちが独身なのわかっててそんなの送ってくるなんて、嫌がらせ以外の何ものでもないじゃん。

由紀 そうかな。

薫 そうだよ。(小百合を真似て) 見て見て、ねえいいでしょう。ほんつと、腹立つ。にしたってさ、結婚そのものは結構遅かったわけじゃない、三十手前でさ。だからその分取り戻そうと、必死さ見え見え。やってらんない、マジうざい。

由紀 (笑い) 本当、かわんないね。

薫 ほんつと。高校で人格形成終わってんだらうね。いつまでたっても自慢したガリのガキのまま。

由紀 薫ちゃん。

薫 あたし？え、あたし？何、どこが。

由紀 昔からさゆりんのこと悪く言ってたじゃん。

薫 だってムカつくじゃん。ここ禁煙？

由紀 あ、多分。ごめん、席、

薫 ああ、いい、いい。最近、減煙してるから。

由紀 お塩みたいだね。

薫 煙のほうだけだね。(とパイポを取り出す)

由紀 何それ。

薫 知らない？禁煙パイポ。スカスカするだけだけど、多少は気がまぎれんの。

由紀 いや、知ってるけどそれ、何かおっさんみたいだよ。

薫 いいの、口寂しいのがまぎれば。誰の前でもやってるわけじゃないし。

由紀 うん、やめときな。もてなくなるよ。

薫 別に、もともともてないし。ちよつと遅くない？レモンテイ。

(大きく、ウェイターに) すみません。さっきレモンテイ注文したんですけど。(ウェイター)「かしこまりました、すぐお持ちします」 お願いしまあす。どう最近？

由紀 何が？

薫 彼氏は？あるいは、彼氏じゃなくても、何でもいいから浮いた話。

由紀 ああー。

薫 何かあるでしょ、しばらく会ってなかったんだから。

由紀 まあ、なくはない、くもない、ってわけじゃない、っていうわけでもない、っていうのかなあ。

薫 なんじゃい、どっちじゃい。あ、リンフ？まさかリンフ？

由紀 リンフ？

薫 いやさ、最近周りに多くてさ、何ていうか、セカンドワイフ？

由紀 それゲームでしょ、セカンドライフ。

薫 なんだけどさ、明るい感じするじゃん、不倫とかって言うより。

由紀 え、ねえ、多いんだ？

薫 うん、多い、年齢に関わらず。家に奥さんいて、外に彼女いて、どっちに行ってもたーのしー、みたい。ようやるわと思いな

がら見てるけど。金かかるだろうし。

由紀 ふうん。

薫 で？由紀はリンフなの？

由紀 んん、いや、そういうんじゃないけど、まあ。

薫 何。

由紀 グレーゾーンっていうのかな。一緒にいるときは楽しくやってるけど、でも本当のところはどうなんだろうっていうさ。曖昧な？そんな感じ。

薫 ふうん。

由紀 薫ちゃんは？

薫 うん？

由紀 何かあった。いいこととか、悪いこととか。

薫 うーん。ま、強いて言えば、両方？

由紀 両方。

薫 いいことは、彼氏ができた。

由紀 あらあ。

薫 悪いことは、浮気されてるっぽい。

由紀 あらあ？

薫 セカンドの携帯、発見しちゃったんだよね、奴の鞆の内ポケから。

由紀 あらあらら。え、何それ、漁ったの？

薫 ちいがあうう、たまたま見えちゃったの。鞆のチャックが開いてて、内ポケのチャックも開いてて、みたい。

由紀 にしたってさ。

薫 違う、違う、違う。鳴ってたのさ、バイブで。彼が家でトイレ行つてるときに、彼の携帯がこつちにあつて、あたしの携帯がここにあつて、ほいでどつちも鳴つてないのにブーツ、ブーツで。そしたらさ、彼の鞆の内ポケの奥の方に、地味いな色合いのさ、いかにもビジネス用ですみたいなのをさ、見つけちゃつたんだよねえ。

由紀 仕事用なんじゃないの？

薫 違う。あ、いや、違うというか……登録されてんのがさ、一件しかないんですよ。仕事用だったらないでしょそんなこと。だから多分そうなんだよ、どっかの誰か専用の携帯。

ウエイターがレモンティを持ってくる。薫、居住まいを正す。

ウエイター「大変お待たせ致しました。レモンティでございます」

薫 はあい、どうもお。

ウエイター「失礼します」、行く。

薫、ポットからカップに紅茶を注ぎ、飲む。

由紀 薫ちゃんさ。あの子好みでしょ。

薫 あちつ……わかる？

由紀 わかるよ。サラ髪、眼鏡、すつきり鼻筋。薫ちゃんのど真ん中。そうなんだよね。これはもう、業だね、カルマ。眼鏡つてだけでどんな人でも一気にストライクゾーンに入っちゃう。外角、内角、どんなタマでも一応振っちゃう。

由紀 見極め、あま。

薫 そうなのよ。でさ、今の彼氏もご多分にもれずでさ。サラ髪、眼鏡、鼻筋スーッ。でもさあ……やばい、また落ちてきた。

由紀 ああ、ほら、レモンティ飲んで、あつたかいうちに。

薫 うん。(ふいて冷まし、飲む)

由紀 でもさ、わかんないじゃん。携帯さ、仕事用かも知れないじゃ

ん。

薫 違う。絶対違うって。だって仕事用だったらもっというろ使
ってるはずじゃん。それが登録先一件よ、一件。しかも先々月
くらいから。浮気相手専用の携帯なの、絶対。

由紀 何でわかるの。

薫 その頃から、メールの返信が遅くなった。それまでそんなこと
なかったのに。

由紀 うーん、そうか。でも仕事がとんでもなく忙しかった、とかさ。
うーん。

由紀 (カップを持ちつつ) 仕事、何？

薫 あんたと同業。

由紀 え、編集？

薫 そ。あんまおっきくない会社だけど。

由紀 ええ、どこどこ？

薫 ゼウス出版。知ってる？

由紀 (コーヒーを一口飲み) うん。

薫 あ、知ってるんだ。さすが同業。

由紀 社会科学系の専門書がメインのところでしょ。大学の教材とか。
法律と歴史に特に強い。

薫 かな。難しいことはよくわかんないけど、そんなようなこと言
ってた、気がする。

由紀 どこで会ったの？

薫 合コン。うちの同期がセッティングしてくれてさ。あたしが眼
鏡鼻筋サラ髪好きだって言ったら、そんなのばーっかり集め
てくれて。ああそうだ、ねえ、それがおっかしいの、みんなサ
ラ髪、眼鏡、鼻筋すーって、どっかしか似た感じなんだよね。
こんにはサラサラア、どこ住んでんの眼鏡ー、俺バイク好き
でさ鼻筋ー。

由紀 へえ。

薫 あんだけそろうとさすがに笑えたわ。でね、だけどね、そんな
で一人だけ、あーこの人なら眼鏡なくても好みだなんていう
人がいたの。

由紀 ほお。

薫 話上手でさ、飽きさせないっていうか。話聞いているだけで楽し

くつてさ。

由紀　へえ、薫ちゃんにしては珍しいね。どっちかっていうと話した
いほうじゃないの？

薫　うん、それがね。珍しいの、そうじゃないの。一歩引いてられ
るっていうか、安心して任せられるっていうか。だからさ、今
回はいけると思ったんだけどね。

由紀　何が？

薫　結婚。

由紀　……お、お、おー？本気だったんだ？

薫　過去形じゃないけど。

由紀　あら。

薫　本気みたい。好きなんだよね、どうにも。肌合いもいいしさ。

由紀　薫ちゃん、まだ昼間。お日様出てる。

薫　そうだけど、あーもうどうしよう、へこむなあ。もうこれ以上
の人、出会わなさそうな気がするんだよねえ。

由紀　そんなことないよ。

薫　ね、変なこと話していい？

由紀　何。

薫　引かない？

由紀　何が。

薫　絶対引かない？

由紀　言わなきゃわかんないって。

薫　あたしさ、実は今、ちよっとイっちゃってて。

由紀　何。

薫　電話しちゃうんだわ。その、彼のセカンド携帯にあった登録先
に。イヤヨ発信で非通知になるじゃん？それで何度も何度も
自分でもやつべーって思うんだけど、でもやめられない。

由紀　やめられない、とまらない。

薫　そう、かっぱえびせん的な。今そいつが彼と会ってんじゃない
かーとか、今彼から連絡ないのはそいつと何かやってつから
じゃないかーとか。悪い方に悪い方に考えちゃってさ。夜中な
んで得にヤバイ。不安と怒りと、どうしようもない孤独な感じ
がぐっちゃんぐっちゃんになって、耐えらんない、もう無理つ
てなると、携帯、充電器からガーとってバンバンバン発信

する。もうガンガンに履歴残す、こいつの携帯、あたしで埋めてやる、くらいな勢いで。ああもうマジやっぱいなあ、これ以上やったらこっちの頭がおかしくなるってなったところで、ギリ我に返ってとめる。ほいで後は、しくしく泣きながら、とりあえず少しでも寝なきやって思っただけ、興奮しちやっけて眠れない。いつの間にか、ああ朝だわ、みたいな。……

由紀 どうしよう、由紀。あたしこのままだとストーカーになっちゃう。

由紀 大丈夫、なんない、なんない。

薫 てかもうストーカーじゃん、リアルに。

由紀 大丈夫だって。ほい、元気出す。レモンテイ飲む。

薫 (一気に飲む)

由紀 お水もろう？

薫 (いやいやをする)

薫、ポットからカップに残りの紅茶をそそぎ、
スプーンでレモンをつぶす。

由紀、コーヒーを飲む。

由紀 まあさ。へこむよね。三十こえるとき、恋愛することだけでも結構勇気いるからさ。

薫 由紀は？

由紀 何。

薫 由紀の、グレーゾーンの方は、どういうふうなグレーなの？

由紀 どうって、そうねえ。

薫 言いくかかったらいい。

由紀 いや、言いくかかってことはないけど……おこんない？

薫 おこんない。

由紀 いや、やっぱでも。

薫 いい、大丈夫、絶対。

由紀 本当？

薫 うん。

由紀 うん。……彼女がいる人とお付き合いさせて頂いてます。

薫 ……マジ？
由紀 マジ。
薫 セカンドワイフ？
由紀 セカンドワイフ。あでも、結婚してないから、リンフじゃない。
薫 だっつったってき。……ああ、由紀まで。何、これ、何？はや
り病？
由紀 ペストかい。
薫 ね、いいの？由紀的には、それでいいの？
由紀 いいっていうか何と言うか、そりゃよくはないけど。
薫 知ってんの、その、ファーストは？
由紀 ファーストは、そうねえ……最近、バレたかも。
薫 何で。何でわかるの。
由紀 おこない？
薫 おこない。
由紀 あ、でも。
薫 いいから。
由紀 言いにくいんだけどさ。
薫 うん。
由紀 最近さ、非通知で電話かかってくるんだ、ヤバいくらいの数。
一日に、最低でも三十回。
薫 ……
由紀 だからさ、どんまい。よくある話なんだよ、こういうの。
薫 あんたそれ、どうしてんの。
由紀 仕方ないよ、スルーするしかない。留守電も入ってないし、番
号も出ないし。
薫 男には言ったの？
由紀 いや、まあね、それとなく。何か最近変な電話かかってくるん
だけどって。
薫 そしたら？
由紀 ああそう、最近変な事件多いから気をつけなって。
薫 なんっじゃそりゃ、どえらい鈍い。
由紀 うん。ちよつとね、お鈍いところがありました。あー、でもよ
し、うん、決めた。
薫 何？

由紀 駄目だ、やっぱ、セカンドに甘んじてちゃ。ちゃんと話して、このままじゃやだって言ってみる。

薫 お。

由紀 ずっともやもやしてたけど、すっきりした。ありがと薫ちゃん。

薫 うん。あたしも、ちよつと頑張ろうかな。

由紀 何。

薫 その登録先の留守電に、メッセ入れてみる。これまでストーリーかーみたいですいませんでした、よければ是非お話させてくださいって。勘違いなら勘違いで安心するだけだし。

由紀 いいね。頑張れ。

薫 ……ねえ。今、ここでかけていい？

由紀 今？いいけど。

薫 留守電にさえ入れちゃえば、あとはふんぎりつくから。

由紀 いいよ、わかった。

薫 ふうー。

薫、携帯を開く。

薫 ふられたら、なぐさめてね。

由紀 あたりきですよ。

薫、発信ボタンを押す。

由紀の携帯、鳴る。

由紀、携帯を鞆から出し、着信画面を見る。

由紀 ……

薫 もしもし。私、田代薫と申します。これまで何度もお電話してしまつてすみません。お伺いしたいことがありますので、これを聞きましたら是非、

由紀 (電話に出て) 薫ちゃん。

薫 ……

二人、目を合わせたまま。 ■

「宅急便」

扉が一つ。その脇に、表札と呼び鈴。

運送会社の制服を着た男、手押し車に、梱包された大きい荷物を乗せて運んでくる。手には伝票。

表札と伝票を見比べて確かめ、呼び鈴を鳴らす。無反応。もう一度鳴らす。やはり無反応。

扉をノックし、呼びかける。

男

(ノック) 笹浦さん。:(ノック) 笹浦正人さん、クール便のお届けものです。:(強くノック) 笹浦さん。

女が現れる。片手に買い物袋を提げ、アイスを食べながら現れる。通り過ぎようとするが、男に呼び止められる。

あの、すみません。

……はい。

お隣にお住まいの方ですか。

ええ、まあ。

あのですね、

ごめんなさい。

……え？

ごめんなさい。

あ、え？あの、

荷物預かってくれって言うんでしょ？

あ、ええ。

だから、ごめんなさい。

……あ、できないってことですか？

そう。じゃ(去ろうとする)

ちよつ、ちよつと待ってください。

はい。

いや、あの、こちら、いつ頃戻られますかね？

知るわけないでしょ、家族じゃあるまいし。ただのお隣さんな

男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女

女男女男女男女男女男 女男 女男女男女男女男 女男女男

んだから。

ですね、はい、すみません。

アイス食べる？

はい？

買ってきたんだ、久しぶりに食べたくなって。（と買い物袋を漁る）

ああ、いや、いいですいいです、まだ僕、仕事で。

そう？ 厳しいんだね。

ええ、まあ、そうですね、いろいろ。

留守多いのよ。

え？

この人。

ああ。

でもその割に届け物多くてさ。よくおたくみたいの人に頼まれて、前は預かったりもしたんだけど。

はあ。

でもあたしもいないこと多くて、結局渡すタイミング逃しちゃうんだよね。それで正直さ、今も困ってて。あたしの家、この人のモノで一部屋埋まってるの。

そうですか。

これ以上預かると、あたしの家かこの人の家かわかんなくなっちゃうから。だからさ、ごめんなさい。

ああ、いえ、そんな、とんでもない。

アイス食べる？

いや、ですから、

いいじゃん、一本くらい。この暑さなんだし。

いや、いいです、いいですから、大丈夫です。

そう？

お気持ちだけで、十分、ひんやり。ありがとうございます。

まじめだな。しかしでかいね。中身、何？

ええとですね（伝票を広げる）……

（伝票を覗き込み）……

二人、荷物を見つめる。

女 じゃ（行こうとする）

男 （女をつかまえる）

女 預かれません。

男 わかってます。

女 アイス溶けちゃうんで。

男 買います、僕が。

女 そういう問題？

男 そういう問題。

女 だって、これ。

男 僕だってそう思います。

女 よく預かったよね。

男 誰も疑問に思わなかったんでしょね。

女 無責任だな。

男 仕事、ですから。

女 そりゃま、そうだけど……にしても、死体って。

男 もうちよつと、書きようありますよね。

女 うん。せめて、ナマモノとか。

男 ですね。そうすれば、魚とか肉かなって思えますし。

女 でもこの大きささ……やっぱさ。

男 ……はい。

女 重さは？

男 ええと、72キロです。

女 ちようど、成人男性な感じだね。

男 はい。

女 ……（行こうとする）

男 （つかまえる）

女 アイス、溶けちゃうんで。

男 食べます、僕。食べたくて。

女 仕事中でしょ？

男 業務の一つととらえます。

女 ……

女、アイスを買った物袋から出し、男に渡す。
男、包みを開け、アイスを食べる。

警察は？

考えますよね、ふつう。

みんな職務に忠実だったんだね。

ええ、規則が厳しくて。たぶん、考える余裕もなかったんだと思います。ほら、お中元の時期で、忙しかったし。

そっか。

でもあれですよ、持ち帰るのも何ですよ、モノがモノだし。できれば一刻も早く手放したいよね。

ええ。

あ、でもさ、しばらく預かったら、送り主に戻せばいいんじゃないの？

それがですね、送り主もこちらなんですよ。

え？……あ、そうか、出張先か何かから、自分の荷物を自分の名前で送るとかっていう、そういう呈か。

そうだと思います。

そうだ、電話。電話してみたら？ 書いてあるでしょ、番号。ああ（伝票を見て）そう、ですね。一応、かけてみますか。

うん。なんなら代わるよ。
ありがとうございます。ええと、090…。

男、電話を耳にあてる。

荷物の中から、着信音が鳴る。

男、しばし荷物を見つめ、電話を切る。

荷物の着信音、止む。

男 女
いないわけだ。
ですね。

「きみとからっぽ」

何も無い部屋。

女が一人、未開の缶ビールを手に入ってきて来る。
部屋を眺め、歩き回り、壁に寄りかかるなどして、
部屋に別れを告げている。

女1 ありがとう。

女1、缶ビールのプルトップを開けようとする。
そこへナップザックを背負い、手に買い物袋を
下げた女2、現れる。

女2 えっ。

女1 えっ。はい。

女2 ここ、203号室ですよ。

女1 はい。

女2 プチメゾン。

女1 はい。

女2 あー……

女1 あの、ひよっとして、

女2 はい。

女1 次、入られる方。

女2 はい。あ、これまでの。

女1 はい。え、何、もう、

女2 はい。てかトラック、そうですね、もう少ししたら着くと思
います。

女1 えー。

女2 何か、忘れ物でも。

女1 とうか、私、今日までなんで。

女2 はい。

女1 今日までは、私の居る権利があるんで。ここ。この部屋。

女2 そうですね。でも、と言われましても、私も今日からなんで。

女1 今日からここに住む権利があるんで。そういう話だったんで。えー。誰と。

女2 大家さんですよ。不動産会社に連絡したら、直接やりとりしてくれって。

女1 でもこっちは、今日中に出てくれればいいからって。

女2 でもこっちは今日には入れるようになるからって。

女1 えー。聞いてない。

女2 あー。でも鍵開いてましたし。

女1 えー。それはこっちも、引っ越し作業してましたんで。業者が出入りしやすいように。

女2 あー。まあ、だとしても、荷物来ちゃうんで。

女1 えー。いやいやいや。ええー。

女2 何か、まだご用事ですか。

女1 いや、ご用事ってほどではないですけど。

女2 ……缶ビール？

女1 ああ。お別れの儀式を。この部屋と。

女2 ああ。

女1 三年居たんで。それなりに、ねえ、思い出もありますから。何ていうか、その、区切り？みたいなもんです。

女2 ああ、わかります。私もやってきました、前の部屋で。どうぞ、思う存分なさってください。私は気にしませんから。あ、そうだ（手にしていた買い物袋から、紙袋を出し）来る途中のパン屋で買ってきたんです。肴にどうですか。プチシュー。

女1 えー。

女2 意外に合うんですよ、甘いものとビール。成人病まっしぐらな組み合わせですけど。どうぞ。（とすすめる）

女1 いえ。

女2 どうぞ。引っ越し蕎麦がわりに。

女1 ……わかりました。（二つ取り）いただきます。（食べる）

女2、部屋の中をチェックしだす。壁、床、窓、など。触ったり、軽く叩いたり、軽くこすってみたり。

女1 これ、商店街の入り口にあるとこのですよね。
女2 そうそう、モン……モシユ……
女1 モン・シェリ。
女2 そうそう、そんなような。いいですね、あの商店街。
女1 はい。駅前にはスーパーできてから平日はちよっと客足弱まったみたいですけど、でもやっぱり休日なんかは。
女2 (部屋について)なるほどね。
女1 ……
女2 (壁の一部をよく見て)穴。
女1 あ、そこ、カレンダー貼ってたんで。
女2 ふうむ。
女1 ……
女2 これは？(と窓枠の一部を示す)これ。ここにあるでしょう、ひっかき傷。
女1 ああ。雨の日に部屋干ししたときに、確かハンガーで。
女2 ふうむ。
女1 ……
女2 (天井の隅を指し)あれ、何ですか。
女1 さあ。私が来たときには既にありましたけど。
女2 雨漏りか何かですかねえ。
女1 さあ。あの、気になるなら、大家に。
女2 (携帯を出し、写真を撮る)ふうむ。
女1 ……
女2 あ、すみません。問題あったら家賃下げてもらおうと思って。
女1 ……そうですか。
女2 生活、楽しいやないんで。あと他に、何かありましたか。こう、住んでいて、近所のどこかで赤ん坊の夜泣きがうるさいとか。
女1 いえ、特には。割に、快適でした。
女2 そうか。(軽く舌打ちし)そんな強気には出られない、か。
女1 ……
女2 (電卓を出し)光熱費が二万。通信費がネットとあわせて一万。食費が切り詰めて月三万として……
女1 あの。

女2 はい。

女1 出てってもらえますか。

女2 はい？

女1 あなたが何をどう聞いていようと、今日一日は私にここに居る権利があるんです。深夜0時までには、ここは私の部屋なんです。

女2 ……

女1 お別れしたいんです、ちゃんと。ここに。ここに居た自分に向けてっめていうか。私の人生、三年分受け入れてくれた場所なんで。お願いします。

女2 すみません、そうして差し上げたいのは山々なんですが。荷物が届いちやうんです。いま、トラックこっちに向かつて。

女1 止めてください。

女2 そうは行きません、一日いくらで契約してるんですから。あるいはあなた、お支払頂けますか？追加料金。

女1 何で私が。

女2 でしょう。そうなるでしょう。ですから、残念ですが。

女1 ……信じられない。

女2 すみません、フリーランスなもんで、生活かかってるんで。

女1 ……

女2 (電卓をはじき) 三十二円。おまけして、三十円。

女1 何が。

女2 さつき、召し上がりましたよね、一つ。プチシュー。

女1 ……

女1、財布から千円札を取り出し、女2の手に押し込み、出て行こうとする。

女2 ちよつと待ってください、多いですよ。

女1 餞別です。では。

女2 ちよつと、ちよつとちよつと。(引きずり込み) 何考えてるんですか。お金持ちですか？ あんなプチシュー一個に千円払ってたら、通常の大きさのシュークリームは一万円になっち

やいますよ。

女1 でも、いいです。では。

女2 ちよつと、ちよつと待ってください。いいんですか。別れの儀式、終わったんですか。

女1 強制終了されました。あなたに。では。

女2 待つてくださいって。それじゃまるで私があなたを追い出しているみたいじゃないですか。

女1 違うんですか。

女2 違います。私はただ、荷物が届くって言ってるだけじゃないですか。あなたが居る分には何も困らない。さっきからそう言ってるでしょう。何なら、荷物を上げるの手伝って頂いてもいい。

女1 冗談。

女2 冗談です。でもとにかく、居てください。引っ越してきた初日に味噌がつくの、私だって嫌です。これからしばらくお世話になる空間で、いつもあなたのじつとりした目線を心のどこかで感じて暮らさなくちゃならない。

女1 じつとりって。

女2 不良物件化します。それは嫌。だから居てください、ここに。

女1 ……

女2 どうぞ。

女1 ……

女2 どうぞ。

女1 ……

女2 どうぞ。これも何かのご縁ですし。

女1 (戻る)

間。

女2 お酒、好きなんですか。

女1 全然。

女2 じゃあなんで(缶ビールを?)。

女1 乾杯をしたかったんです。めでたい感じで。

女2 はあ。

女1 勤め先で、昇格したんです。それで、もうちよつと広い部屋に住もうって。

女2 そうですか。おめでとうございます。

女1 ありがとうございます。

女2 ……（プチシューを）召し上がります？

女1 結構。

女2 ……（自分で一つ食べる）ん。美味しい。

女1 ……

女2 他のパンも美味しいんでしょうね。

女1 ……はい。

女2 おすすめありますか？

女1 ……チーズが練り込んであるラウンドロールっていうのがあって、かなりおすすめです。朝食にも、おやつにも。他にもチョコと、メープルと、あと小豆があります。どれもおすすめです。

女2 へえ。

女1 こんくらい（30cm）の長さで、二百円です。お得です。

女2 いいですね。

女1 あと、商店街の真ん中あたりに、練り物屋があります。さつまあげとか、おでん種とか。ここの野菜揚げはびっくりします。

女2 野菜感が半端ないです。生姜醤油がおすすめです。

女1 へえ。

女1 安いです。こんな大きくて、一つ七十円。

女2 いいですね。

女1 あと、この部屋ですけど。

女2 はい。

女1 冬場はお湯の出が悪いです。だからシャワー浴びるときは、少し出っぱなしにしてからじゃないと、裸で震えることになります。トイレは和式が嫌じゃなければ何の問題もないです。洗濯機を深夜に回すとご近所迷惑になるので気を付けてください。あと、ちよつと壁が薄いですが、大騒ぎしなければ大丈夫です。普通の電話くらいなら、夜中でも問題ありません。

女2 わかりました。

女1 あとは、特に。
女2 そうですか。
女1 っつて、こういう説明、普通大家がやりますよね。
女2 ですね。

二人、部屋を眺める。

女2 いい部屋ですね。
女1 いい部屋です。
女2 暮らしやすそう。
女1 はい。日当たりもいいし。ちょうどいい狭さだし。
女2 はい。落ち着きますね。
女1 はい。こんぐらいが、ちょうどいい。大事に使ってやってくだ
さい。
女2 はい。
女1 あ。(ポケットより鍵を出し) これ。
女2 ああ。え、直接？
女1 いいでしょう、ここまで来たら。大家には言っておきます。
女2 わかりました。お預かりします。
女1 あと(缶ビールを渡し)どうぞ。
女2 えっ。
女1 お嫌いですか？
女2 いえ、大好きです。
女1 なら、どうぞ。
女2 ええー。あっ、そうか。ちょっと待ってください。(計算し)
七。あと七つ食べていいです。
女1 え？
女2 お釣りで。プチシュー払い。
女1 ああ。じゃ、遠慮なく。

女1 プチシューを手にし、女2は缶ビールを開ける。
二人、部屋に向けて乾杯。 ■